研究雑話(37)

人間発達の物質的基礎(二):「心練学」の基礎を求めて、アメリカでの川田貞治郎の苦悩。

藤井力夫

前回は人間の発達に関する自然科学的な認識がその時代の障害児教育のあり方と深い関係にあること。障害児教育は理論的基礎として脳研究の進歩を進めてきた歴史でもあったということ。これらについてお話しました。今回はこの点で謙虚にねばり強く追い求めた人物、大島の藤倉学園の創始者・川田貞治郎についてお話したい。彼の存在は遅れて出発した日本の障害児教育にとってきわめて幸せであった。

内村鑑三(研究雑話12)や留岡幸助(同13)、石井亮一(同14)らについてはすでに述べた。どのように指導するか、川田は教育治療の方法を示した実践家として日本の障害児教育をリードした脇田良吉(明治四十二年、京都白川学園創設)、岩崎佐一(大正五年、大阪桃花塾創設)、三田谷啓(昭和二年、芦屋三田谷治療教育院創設)といった実践家のなかでも、教育治療の実践では川田が先導した。国立浪速少年院の小川恂蔵(同15)のところでも述べたが、少年院における遅滞児教育のあり方も川田の実践が一つのモデルであった。

なぜか。それは彼自身が当初から人間の認識の基礎として「注意」の役割に注目し、障害児自身の注意を改善する方法、これを模索したことによる。彼はそれを「心練学」と名づけた。表B－1は心練の生理学的基礎。脳神経のもとで注意が集中し、これにより心が練られていく。冷静になれなかったり、障害をもっていたりする子ども。彼らに対する教育的治療法の確立。これが彼の課題であった。表B－2は「低能児教育所」の目的。結婚し将来の方向を確認した川田は渡米を決意。知人の精神科医の斉藤玉男を通じ在米の野口英世にペンシルバニア大学を進められるが、実践的な研究を求めヴァインランド訓練学校の付属研究所に行く。大正五年、一九一六年のことであった。ここはH・H・ゴッタードが研究部長で、知能検査の標準化と家系調査研究のメッカであった。当時のアメリカの障害児研究の中枢にいたことになる。が、彼は猛烈に勉強しつつも一定の距離をおいた。これらの研究が断種立法へと進むなかで、知能検査のみでも家系調査研究でもない方向。人間発達の基礎としての脳神経系の勉強に戻るのであった。表Cは彼自身が日記に書いている研究課題。なんとしても脳神経系の勉強、解剖実習がしたくてペンシルヴァニア医科大学へと向かう。文部省留学生として杉田直樹がいたが、経済的にはたいへん。脳の損傷部位と損傷機能。川田は脳部位の役割に関する勉強からさらに描画能力の研究へと発展させる。脳がどのように統合されているかまだ混乱した時期だが、注意の生理学から出発し、突き出た大脳としての手、及び描画の能力の研究へと展開して行った。まさに驚くべき卓見。

(北海道教育大学教授)

川田貞治郎

A. 略年譜

1879(M.12).4　茨城県真壁郡(現下館市)、豪農川田清二郎の長男として生まれる。
1897(M.27).4　府立開成中学校入学(15才)。後、キリスト教入信、私立青山学院転校。
1902(M.35).4　独人ハンス・ホウス経営普及福音神学校入学(23才)。1906　島貫兵太夫の「日本力行会」宗教部長。1907　仙台東北学院、宗教部長。
1908(M.41).3　有馬四郎助経営の小田原家庭学校主任として感化教育に従事(29才)。
1910(M.43)　水戸市基督友会に就任。1911.8　水戸市外渡里村に日本心育園(低能児教育所)を開設(32才)。教育的治療法＝「心練」を試みる。1913 12　満川とくと結婚(34才)。
1916(T.5).3　渡米、ニュージャージー州、ヴァインランド訓練学校、付属研究所にてH.H.ゴダードに師事(37才)。1917.2　ペンシルヴァニア大学心理学教室にてホイットマン博士に師事、医科学教室にて脳神経解剖学を実習。1917.9　ペンシルヴァニヤ州立精神薄弱児学校(ポーク)指導員。
1918(T.7).11　帰国(39才)。1919.6　財団法人藤倉学園認可、園長。1926.5　大島元町馬の背に移転
1958(S.33).1　東京都八王子市多摩藤倉学園設立。
1959(S.34).6　召天(80才)。

B-1. 「心練」の生理

I、外部(求心)－視覚、聴覚、触覚より来る。
II、内部(遠心)　①眼球－静粛な状態。
　　②心－思索的に働く。
(日誌、明治43年4月2日)

B-2. 低能児教育の目的

① 生理的矯正により筋肉を訓練し、「心練学」により精神の安定と治療を試みる。
② 授産的な職業の一つとして漆器作業を設け、全国的な「低能児」救済事業の基礎をつくる。
(日誌、明治45年2月16日)

C. 在米中の研究課題

① 精神薄弱児研究の歴史及び文献収集・ノート。
② 精神薄弱児の診断と知能検査の方法について。
③ 精神薄弱児の原因と予防に関する遺伝調査研究
④ 精神薄弱児の注意に関する生理学的研究。
⑤ 脳神経系の病理と解剖実習の体験。
⑥ 描画能力その他にみる脳神経系の発達。
⑦ 精神薄弱児の治療教育の実際について。
(日誌、大正6年1月9日)